

ノート

腕時計とアールデコ

Wristwatch and “Art Déco”

並木 浩一

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2018年3月7日 受理)

腕時計とアールデコ

一般にアールデコは20世紀の初頭に興り、1930年代まで続いた美術・工芸・建築に顕著な芸術潮流であると認識されている。美術で言えばカッサンドルのポスターに代表されるグラフィック、タマラ・ド・レンピッカによる人物画、ジョルジュ・バルビエやアンドレ・エレのイラスト、ピュイフォルカの銀器などはその明らかな「成果」であり、ニューヨークのクライスラー・ビルやエンパイアステート・ビルは新大陸に渡ったアメリカン・デコの「遺構」とも言えるだろう。日本においては現・東京都庭園美術館である旧朝香宮邸が嚆矢であろう。上海の旧租界地にもアールデコ建築は遺されている。フランスに発したアールデコはヨーロッパを席卷し、西向きには新大陸に渡り、東ではアジアに達した。

少なくともこれらの目に見えるアールデコは今も鑑賞され、摩天楼は実用に供されているが、一方ですでに忘れ去られた事物も少なくない。例えば「モードの帝王」と言われたポール・ポワレはアールデコ期を代表するファッションデザイナーであるが、今ではその名も作品も廃れ、社会史と服飾関連の美術館からは外に出ることはない。

ではアールデコの華やかさは過去に追いやられ、追憶を残すのみなのであろうか。そうとは決め付けられない事が実はあるのであって、その証左は「腕時計」の世界に見ることができる。腕時計はアールデコの萌芽が見られた20世紀初頭に誕生し、アールデコを体験し、しかも現在においても、アールデコを生きているのである。

アールデコ期の腕時計

先駆したアールヌーヴォーとアールデコの落差は、それぞれを代表するアーティスト、アルフォンス・ミュシャとカッサンドルのグラフィックを思い浮かべれば判りやすい。草花に囲まれたたおやかな美女を流麗な曲線で描いたアールヌーヴォーと、骨太の直線で真正面や真横から汽船や汽車を描くアールデコ。それはヌーヴォーに続いてデコがあるというような連続線ではなく、接点もない断絶を見せる。アールヌーヴォーが自然をモチーフとした有機的な装飾や曲線を多用したのに対し、アールデコは直線と幾何学的な曲線、抽象化された無機的な装飾が特徴。規格化が容易なデザインは複製・工業化にも適しており、その後のモダン・デザインに道を拓いた源流の

一つでもある。当初は『スタイル・モデルヌ（現代的スタイル）』と呼ばれたアールデコが頂点を極めたのは、芸術と産業の融合を理想とした1925年のパリ・アールデコ博＝現代装飾芸術・産業芸術国際博覧会。「装飾美術（アール・デコラティブ）」からアールデコの名が定着した。アールデコ博には装飾芸術分野でのフランスの威信が賭けられ、カルティエの装身具やポール・ボワレの衣装などが注目を浴びた。

言うまでもなく、アートの潮流は同時代の様々な分野にひろがる。絵画、彫刻、文芸、演劇、音楽、建築などは相互に関係して、影響を及ぼしあっていく。そして、腕時計もその例外ではない。英語でもフランス語でも『art』には芸術と技術の2つの意味があるが、まさにその界面にあるのが腕時計であった。

20世紀初頭から1920年代にかけては、腕時計の黎明期であった。この当時の腕時計には、ポケットウォッチから切り替わる時計自身の歴史の反映が、個々の品に見られる。この時代の腕時計はまず、フォルムの多様性が興味深いカオスを見せている。正方形、長方形、トノー、クッション型などの形が、同時に顔を揃える。懐中時計が内在していた制約である、ポケットから出しやすい形＝丸形を採る必要が無くなった腕時計は、様々な形に作ることができた。20世紀腕時計の第一クォーターは、ケースの多様性の可能性が奔放に拡大した時代である。

一方でディテールには、大きく2つの潮流が見てとれる。一つは、18世紀以来の腕時計のコンテクストに乗っ取った意匠。ブレゲ針やブレゲ数字、ローマ数字のインデックス、大振りのルイ15世様式のリューズなど、前世紀からの伝統を選択した古風な時計である。そしてもう一方は、鉄道線路を意匠化したレイルウェイ・インデックス。一分一秒を無限軌道の上に映しとるデザインは、産業と芸術のインタフェースを表象するアールデコ時計の重要なモチーフとなった。さらに、くっきりとしたアラビア数字、より幾何学的な線の

配置を持った、当時のモダン・デザイン指向と、白色金属の採用。後者は、やがてアールデコに合流していくことになるのである。

腕時計のデザインを語る上で、アールデコの役割は非常に大きい。その誕生期が絶妙のタイミングで交錯したという理由もあるが、なにより産業と美術の調和を目指したアールデコの理念は、腕時計の存在そのものに重なったからだ。腕時計は、アールデコの重要な一部でもあったのである。アールデコがアメリカに伝播し、より華やかなアメリカン・デコを花開かせるのと同調し、腕時計のアールデコも爛熟していく。1930年代後半までの腕時計には、直線と曲線の織りなす華麗な腕時計が多い。アールデコの様相は、実は腕時計によりよく表出しているのである。

ルイ・カルティエと『タンク』

腕時計のアールデコに決定的な役割を果たしたのはルイ・カルティエとそのメゾンである。1925年のアールデコ博への貢献に対し、ルイ・カルティエは賞状を受けたほどで、その人もブランドとしての“カルティエ”も、アールデコの主役の一人であった。その象徴的な品が1904年に誕生した腕時計『サントス』であり、1919年の『タンク』である。

“カルティエ”は1904年、はじめての腕時計『サントス』で角形のフォルムを採っている。懐中時計に代わるモダニズムを、自然界には存在しない角形のビジョンで切り取ってみせた。鎖を引っ張ればスムーズに滑り出て欲しい懐中時計は、角張っているわけにはいかない。20世紀初頭に腕時計が生まれて初めて、ウォッチは角形になる可能性を持った。方形のフォルムは、それだけで現代を表象していた。

丸いものを四角くする歴史は、実は時計に限ったことではない。現代絵画では四角い「タブロー」画が当たり前だが、それは歴史的に見ればかなり後天的な特徴である事がわかる。西洋的絵画といえどもともと宗教画であり、中世の教会の天井に描かれたフレスコ

画がその頂点だ。それが、イエスやマリアを描く祭壇画を経て、ルネッサンス期には富裕な市民層に肖像画ブームを起こす。ポर्टレートは最初、古風な円形のトンド額縁に合わせていたが、やがて四角いカセット額縁が取って代わり、現在のようなタブロー画になった。

偶然とはいえ時計も、宗教の権威を表象する協会の塔時計から、ブルジョア階級の持ち物となり、個別に携帯される懐中時計の時代を経て腕時計に至っている。絵画も時計も、現在のような存在となっていく過程で、そのオブジェクトは四角のフォルムを得た。つまりは人間の尊厳が取り戻される記憶に、自然界には存在しない四角という形が重なるのである。それは時代の転換の予兆であり、同時に進行する現象なのである。自然を模倣するアールヌーヴォーの甘さと、“カルティエ”ははっきり訣別することを選んでいく。

『タンク』が誕生した1917年は、第一次世界大戦終結の前年だ。メゾンではその時計の造形を、創業者ルイ・カルティエが戦車の姿を上から写し取ったといい伝える。確かに、連合国軍が投入した最新兵器、戦車（タンク）が命名の由来であることは間違いなさだろう。ケース左右の直線的な造形は、俯瞰してみた戦車の無限軌道の似姿だ。花でも草木でもなく、欧州大戦を終結させていく人間の理知に範をとったのである。しかしただそれだけにとどまらず、角形のフォルムから細部にいたるまでの整理された直線・曲線による幾何学的デザインは、明らかにすべてが新しかった。鉄道線路を意匠化したレイルウェイ（シュマン・ド・フェール）型のインデックスは、まさに現代を表象していた。レールと枕木を模したはしご状の分・秒目盛りは、現代性を象徴する意匠としててはやされた。同時期（1927年）にカッサンドルが描いた『北方急行（NORD EXPRESS）』のように、移動の手段が飛躍的に進歩した時代を、それは象徴しているのである。その一方で『タンク』は、古風とも思えるローマ数字をあえて

採用している。それは近過去の“ヌーヴォー”をはるかに飛び越えて古代にむかい、ギリシャ・ローマ文化への憧憬と敬意を込めたクラシカルな意匠の再評価である。“カルティエ”は腕時計を通して、芸術とデザインが向かう新しいモダニズムの方向を、明快に指し示していたのである。

1917年は、第一次世界大戦終結の前年だ。連合国軍が投入した花形の最新兵器、戦車（タンク）が命名の由来であると、“カルティエ”には伝わっている。メゾン創業者のルイ・カルティエは、上から見た戦車の姿を映し取ったのだ、と。しかし『タンク』の造形は、ただ兵器の似姿には決して留まっではない。なにより角形のフォルム、整理された直線・曲線による幾何学的デザインのモダニズムは、アールヌーヴォーの甘さとはっきり決別し、現代を先取りしていた。ただしまだこの時、アールデコという名前は生まれていない。

時代が完全に切りかわったのは1925年のことである。この年にパリで開催された前述のイベント、現代装飾芸術・産業芸術国際博覧会。直線と幾何学的な曲線、抽象化された無機的な装飾が、美術・工芸・モード・建築等の分野をまたいで広がり、その斬新さが脚光を浴びた。芸術と産業の融合を理想とした新しい造形は、複製が容易で工業化にも適していた。『装飾芸術（アール・デコラティフ）』から、アールデコということばも一人歩きを始めた。こうして「スティール・モデルヌ＝アールデコ」は誰の目にもわかるものになったのである。

産業と美術の調和を目指した理念が腕時計の存在そのものに重なる状況で、カルティエとその腕時計はアールデコの重要な一部であった。芸術（アール）と装飾（デコ）の融合は、産業革命以後の現代と芸術を結びつける壮大な社会実験にほかならなかった。その成果の一つが「腕時計のアールデコ」である。アールデコ博を最期にアールヌーヴォーは完結し、腕時計は、アールデコという一種の社

会実験に参加したのである。

アールデコの腕時計は、何もカルティエに限ったことではない。例えばルクルト（現ジャガー・ルクルト）の『レベルソ』は1931年の作であるが、その角形シルエットには、モダン・デザインの重厚な底流が透ける。それは、現代にも全く色褪せることのないアールデコの痕跡に他ならないものだ。ケース外郭の輪郭線、ガラス、ダイヤル上のミニッツトラックと、何度も繰り返される直交線。ケース上下に等間隔で刻まれる平行線。直線によって構成される幾何学図形が「デザイン」であり、一直線の溝が「装飾」であることを、世界に認めさせた。しかも『レベルソ』は、腕時計の機械部分をそっくり反転して、裏返しにすることができる。ポロ競技の最中にも着けたままでいられるための着想は、機能主義と芸術的感性の両方を満足させる。

アールデコの流行は、腕時計というプロダクトを懐中時計の文脈から完全に切り離した時期であったといえる。ヴァシュロン・コンスタンタンは普及し始めた自動車を駆る男のために、ステアリングを握っていても見やすい、文字盤を傾けた時計を登場させた。またパテック フィリップが1925年に同社が製作した『1322』のケースサイドのレイヤーに見られるような層状・襞状の反復は、クライスラー・ビルディング尖塔部分の繰り返し線と同様、アールデコの抽象化された装飾の典型である。ロンジンの『ベッレアルティ』のルーツは後期アールデコ真っ盛り、1929年の自社製品にある。オメガのミュージアムコレクション『マリーン』のルーツは1932年の自社モデルにある。ティソが1917年、ロマノフ朝帝政ロシアの貴婦人に望まれて製作された時計、通称『バナナウォッチ』は、明らかにアールデコの到来を予言する。

アールデコ腕時計の現在

アールデコの歴史の中で『腕時計のアールデコ』は特異な存在である。というのも腕時計においては、アールデコは必ずしも終わっ

ていない。過去のムーブメントではないのである。それは過去を模倣するノスタルジックな「アールデコ“調”」のものがあるというようなものではない。または、家具の世界であるような過去の製品の複製権が取引され、レプリカが製作されるというものでもない。実はアールデコを経由した時計ブランドは、少なからず現代もその営みを継続している。ある程度の不在のうちにアールデコ時計の生産再開に踏み切る場合もあれば、そもそもアールデコ・ウォッチを100年作り続けるブランドも存在しているのである。

正確に言えば、アールデコに限らず、流行は腕時計では完全に廃れることはない。腕時計デザインが進歩を止めたわけではない。むしろその逆で造形や意匠、装飾要素もますます多様性を広げている。そうした中で「復刻」というジャンルが確立され、拡大が続いているというのが正解だろう。過去の芸術潮流が再評価されても、建築や絵画、彫刻などの分野での新展開を期待することには無理がある。しかし腕時計だけは、その黄金期をそのまま再現する、復刻の手だてを持っている。それは明らかに新しい流行でもある。

そもそも腕時計の流行には、「変遷しながら積層する」という特徴がある。流行がすたれた後も一部のブランドが留まり続け、縮小したニーズを引き受ける。流行が変わったとしても一部はそのまま残るのである。デザインを変える作り手もいるが、そのまま変えない作り手もいる。結果として今日、腕時計の世界では、過去の芸術潮流のほとんどがキャリアオーバーされ、同時代に存在しているのである。結果として過去100年の腕時計デザインは、現在も多くその姿を留めているのである。その流行は、腕時計だけではなく、時代の潮流を色濃く反映したものだ。腕時計に決定的な影響をもたらしたのがアールデコだ。幾何学的な線、抽象的な装飾要素を多用するデザイン潮流は、腕時計の製作に向いていた。アールデコの奔流に刺激されながら、腕時計自体がアールデコの代表的作品を生んでいっ

たのである。

過去の芸術潮流を腕時計で表現する場合は、多くは引用の手法をとることになる。腕時計はその存在感に比べ、絶対な質量の少なさを特徴とする。小さなものであるから、非常に都合がいい。例えば建築の場合、古いものを壊さなければ新しいものは建てられない。腕時計はいくらでも作ることができる、持ち運べるアートという側面があるということだ。たとえば、コリント式の円柱を、クラウンに見立てることなどは簡単である。ルイ 14 世様式を、ケースに活かすこともできる。20 世紀初期のアールヌーヴォーの特徴は、特にレディス腕時計で花など自然の意匠を多用したデザインに残る。バウハウスからモダニズムは言うに及ばない。しかしそうした中でも、アールデコの人気は突出している。今日まで、腕時計に最も大きな影響を遺しているのがアールデコである。現在もアールデコ・スタイルの腕時計は新製品が登場し、また新たなエッセンスが加えられる。それを支持するものの多くは、言うまでもなくもう、アールデコの時代を経験してはいない。自分が生まれていない時代のものに対する憧憬は、郷愁を伴わない。腕時計のアールデコは過去のものではないのだ。

過去 5 年ほど (2013-) を概観してみても、パテック フィリップは 1925 年に同社が製作したピース、1322 モデルにインスパイアされた『クロノメトロ ゴンドーロ』で喝采を浴びた。中心に向けて盛り上がったキャンバード・トノー型に、2 種類のハンドギョーシェを施したダイヤル。デフォルメされたパリ数字風のアラビック、シュマン・ド・フェール (鉄道線路) 型のインデックスは、アールデコ真っ盛りの時代を彷彿とさせる。また『ゴンドーロ カレンダーリオ 5135』は、目には見えなくとも厳然と存在するコードの連環の中に場所を占めている腕時計だ。1920 年代、パリで誕生したモダン・デザインの萌芽はやがてニューヨークでアールデコ後期の花を開かせた。それと呼応するように、国際都市ジ

ュネーヴの時計アトリエでも、未来の形象が模索されている。幾何学的な直線と規則的な曲線の特徴としたアールデコ期の高級腕時計から、非ユークリッド的な曲面の構成に羽ばたこうとするフォルムの変容は、その華やかな美術的変遷を現在の形に留める。実はパテック フィリップは 1925 年に、“永久カレンダー搭載の腕時計”を世界で初めて発表した時計ブランドでもある。そのアールデコ爛熟期にもあたる時期の作品を蘇らせたかのような腕時計が現代の『5940』である。円形ではなくクッション型のケース、文字盤外周に敷かれたシュマン・ド・フェール型ミニッツトラック。半面、ブレゲ数字やリーフ針のクラシカルな意匠。時代を交錯させるフォルムと細部が、本物の“腕時計のアールデコ”の経験を語り出す。

ヴァシュロン・コンスタンタンの『ヒストリック・アメリカン 1921』もまた、20 年代の輝かしさを垣間見せるディテールのショーケースだ。クッション型のケースに、先端の丸を穿ったブレゲ針、鷲ペンで書いたような流麗なブレゲ数字。レイルウェイ型のミニッツトラックは、やがてアメリカで大流行するアールデコ・デザインを先取りしていた。また『ウール・クレアティブ』は、過去にヴァシュロン・コンスタンタンが製作したレディスウォッチのアーカイブから甦る、現代のコレクションだが、2016 年に香港で発表した『ウール・ディスクレット』は、往時のアールデコ・スタイルを今に伝えるジュエリー・ウォッチである。『秘められた時』を意味するタイトル通り、315 個、総計 3.80 カラットのダイヤモンドを整然とセッティングした扇を開くと、マザーオブパール文字盤が現れる腕時計である。直線を生かした幾何学的なデザインは、実際のアールデコを経験したブランドならではの。

ティファニーは、アールデコ・スタイルの『ティファニー ギャラリー』を製作した。アールデコ・ウォッチに特徴的な、角形のフォルム。文字盤はサークルで大胆に切り替えた。

内側には緻密なミニッツトラック、外側には畝が太く、くっきりとした放射状のサンレイ・パターンを敷く。幾何学的な構成の中心となるサークルと、アラビア数字を天地に配したアワーマーカーは、実は繋がっている。アールデコ期に発展した『金属の装飾』の記憶を留める、美術的表現。デフォルメされた数字は、真正面から見ても立体的な視覚効果を誘うダイナミズムを持つ。

ヴァンクリーフ&アーペルのプレスレットウォッチ『ルビー シークレット プレスレットウォッチ』(2016)は、製作社自身が『アールデコのスタイルで全体が統一され』ていることを認めている。

ハリー・ウォンストンはニューヨーク五番街本店の玄関アーチをモチーフに採り入れた、アールデコの流れを汲む角形の『HW ザ・アヴェニュー C』を作った。

フランク ミュラーの腕時計における代表的なケース形状は『トノウ カーベックス (トノウ サントレ)』であるが、この3次元曲線の完璧なバランスによる立体的なフォルムは、アールデコを蘇らせたものだ。アールデコの黎明期前後に誕生した樽形のデザインはひとたび廃れていたが、1980年代に“フランク ミュラー”が見直し、完全に再構築した。本来の大時代的なシェイプに、腕時計の中心を頂点として縦軸・横軸双方からカーブをかけ、3次元的な丘状の構造を持つ独創を加えた。ガラスが湾曲していることはもちろん、ケースバック側では手首に沿うような曲面を描く。アールデコの平面構成に範を採りながら、2次元の設計を3次元のデザインに一変させたのである。

ジラール・ペルゴの『ヴィンテージ 1945』は同社の1945年モデルをルーツとするが、それは当時においてのアールデコ・スタイルの回顧という性格があり、さらには直接アールデコにインスパイアことを表明する正方形のモデルをリリースしたこともある。

ピアジェが2000年からスタートした『エンペラドール』の連作はもはやピアジェのロ

ングセラーであり、人気のモデルである。スタイルは後期アールデコの流れを思わせるような、幾何学的に整理された線に柔らかなフレアが絡むもの。クライスラー・ビルを見上げたような、大胆な造形美を見せる。

ロンジンは、1929年の自社製品をモチーフにした『ベッレアルティ』で、爛熟した後期アールデコの香気を漂わせるデザインを見せた。長方形のダイヤルのフォルムがドーム型のケースに延長され、際立って長いラグに続く。シルバーの文字盤にすっきりしたパリ数字、ブルーのスケルトン針。特徴的な幾何学模様のレリーフ装飾と合わせ、クールな直線の構成が華麗にグラマラスになっていく。

ティソは『バナナウォッチ』を復刻した。バナナのように全体が湾曲したケース、パリ数字をケースに合わせるように、大胆に変形したダイヤル。パリを中心として花開いていた当時の初期アールデコの、香りを振りまくような華麗さが眩しい。おそらくはそのエッセンスを凝縮してウラル山脈の向こうに伝えるために、デフォルメしたデザインが採られた時計。その意図が、1世紀近い時を超えて甦る。センスがいささかも古びない、アールデコの封印を解かれた腕時計である。

ジャガー・ルクルトは『レベルソ・クラシック』の名で発表したレトロスペクティブなモデルについて「アールデコのインスピレーション、幾何学的なフォルムのケース、ゴドロン、まっすぐなアラビア数字、レイルウェイミニッツトラックは、流れる時と移り行く流行を静かに見守っ」ていると説明した。

カルティエにおいては『タンク』も『サントス』も、1世紀を超えて作り続けられている。アールデコは大西洋を超えてアメリカに伝播し、ダイナミックな“アメリカン・デコ”を花開かせる。1930年竣工のクライスラー・ビル、翌年のエンパイアステート・ビルはいずれもアールデコの名建築である。その前後、5番街のカルティエ ニューヨークで人気を集めていたのは、手首に沿って湾曲させた『タンク・サントレ』のバリエーショ

ンであった。縦に極端なディストーションを加えたフォルムは、天を衝く「アールデコの摩天楼」を予言したようにもみえる。現代はもうアールデコの壮大な建築は造られない時代ではあるが、そのレガシーが世界の首都を見下ろすように、アールデコを体現する腕時計は、今もラグジュアリーの中心にいる。ちなみに1989年にはカルティエの歩みを振り返る一大回顧展「カルティエの芸術」が開催されている。フランスでの会場は1900年のパリ万博会場として建てられたルネッサンス様式と18世紀様式が混交する壮麗なプチ・パレ美術館であったが、この展覧会は後に日本に巡回し、我が国を代表するアールデコ建築である東京都庭園美術館が会場に選ばれている。

爛熟したアメリカン・アールデコの流行は、1940年代には収束する。しかし腕時計のアールデコは一過性の流行に留まらず、一つのデザインジャンルとして定着した。建築や美術の様式としてはその影響力を失ったアールデコは、腕時計ではその後も人気を保ち、今なお強い影響力を残している。それはアールデコが内包する『産業と芸術の融和』というテーマが、今日まで続く『ただ時間を知るため道具ではない』腕時計の存在意義に重なっているからだろう。フランスで興ったアールデコは、機能や合理性といった近代社会の要求を、アートに直接結びつけ、昇華させたのである。アールデコの様相は、実は腕時計によりよく表出している。しかもそれは現在に続く。腕時計において、アールデコは決して終わっていないのである。

【主要参考文献】

- Benton, Charlotte/Benton, Tim/Wood, Ghislaine: “*Art Deco 1910–1939*”, Victoria & Albert Museum, 2015.
- Bréon, Emmanuel/Rivoirard, Philippe: “*1925 Quand L’Art Déco Séduisit Le Monde*”, Norma Edicions, 2017.

- Charles, Victoria/Klaus, Carl H.: “*Art Deco (Art of Century)*”, Parkstone Pr, 2013.
- Goss, Jared: “*French Art Deco*”: Metropolitan Museum of Art, 2014.
- Icon Group International: “*Montre: Webster’s Timeline History 1498–2007*”.
- Icon Group International, 2010.
- 笠木恵司／並木浩一：『腕時計雑学ノート』、ダイヤモンド社、2000.
- 並木浩一：『腕時計一生もの』、光文社、2002.
- 並木浩一：『男はなぜ腕時計にこだわるのか』、講談社、2008.
- 並木浩一：『腕時計のこだわり』、ソフトバンククリエイティブ、2011.
- Weber, Eva: “*Art Deco*”: J G Press, U.S., 2004.
- Willis, Carol: “*New York Deco*”, Welcome Books, 2009.